
大和の義兄は最強の武士！！

怒レイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和の義兄は最強の武士！！

【Nコード】

N9854Y

【作者名】

怒レイン

【あらすじ】

2―Sと2―Fの川神大戦に大和の義兄の蓮夜が乱入する！

本編は川神大戦から始まります。が、2、3話書いたら戦国BASARAや恋姫無双にトリップします

主人公プロフィール

オリジナル主人公プロフィール

『名前』

・織田^{おだ}蓮夜^{れんや}

『性別』

・男

『身長・歳・体重』

・176?・17歳・67?

『好きなもの・嫌いなもの』

好き・風間ファミリーと肉と剣

嫌い・ホモやレズ

『容姿・性格』

容姿・白銀の髪に赤い目をしている。顔は上の上でかなりのイケメンである（本人は自覚をしていない）。

性格・自由気ままでやりたい事や興味があるものには積極的に参加するが興味が無いものは適当やる。大和や翔一は甘い。

蓮夜は日本の道場や暗部を総ナメしている。蓮夜が行った道場は尽く潰れている（師範が負けるから）。ちなみに武器は拳一つだけ

一話（前書き）

主人公は流派にこだわriません

一話

蓮夜「やっと着いた」

大和に呼ばれて川神に帰って来たが・・・

蓮夜「川神学園じゃ無いのか？この紅いのは何だ？」

ブルルルル

蓮夜「大和！お前何処に居るんだ？」

『今は川神大戦で2―Sと戦って居るんだ』

蓮夜「！今すぐ行くから持たせるよ大和！！」

『分かったよ。早く着てよ兄さん』

そういつて電話を切った。

蓮夜「よっしゃ！早速行くか！」

大和サイド

大和「ふう〜。」

翔一「誰から電話が来たんだ大和？」

大和「頼りになる人兄貴？」

翔一「あの人が来るのか!？」

岳人「あの人つて・・・蓮夜か!？」

クッキー「蓮夜が来るなら大丈夫だね！」

卓也「でも、いつ呼んだの?大和？」

大和「先週だよ」

大和サイドOut

うーん。着いたはいいが、あちこちに強い気を感じるな・・・

蓮夜「むっ!、モモ先輩が強い気の奴を倒したな。大和から聞いたがモモ先輩は敵だよな」

なら決まりだな

百代サイド

まゆつちを倒した後、揚羽さんと松永を倒さなきゃか・・・

揚羽「九鬼家決戦奥義・古流昇天波!!」

ズドーーーーン!!

百代「腕は衰えて無いな揚羽さん!!」

燕「行くよー百代ちゃん!!」

ビュウウウウ!!

百代「川神流星殺し!!」

プキユイイイン!!

燕「きゃああああ!!?」

燕さんを飛ばした時に懐かしい奴が現れた

スドーーーーン!!

「久しぶりだなモモ先輩」

百代サイドOut

揚羽さんも燕さんもやられかけてたし

蓮夜「久しぶりだなモモ先輩。」

百代「大和め、まさか揚羽さんだけじゃなく、蓮夜まで引き込むなんてな」

蓮夜「燕さんと揚羽さんは休んでいてください!!」

揚羽「ああ、頼んだぞ蓮夜」

燕「よろしくね蓮夜くん」

さて、久しぶりに本気を出すか

百代「行くぞ蓮夜！禁じ手・釘椿！！」

蓮夜「仁雷裂波っ！！」

ズガーーーーーン！！

百代「くっ！？」

蓮夜「タアアアアア！！」

百代「ハアアアアア！！」

シュンツビッシュンツシュンツシュンツシュンツシュンツカッ
シュンツカッシュンツシュンツ

蓮夜「チッ・・・喰らえっ！！」

百代「大振りを待っていたぞ！！」

ズガーーーーーン！

百代「弱くなつたな蓮夜」

蓮夜「・・・ニッ」

ボコボコボコッ

百代「しまった!？」

蓮夜「…川神流・人間爆弾…」

ドカーーーン!!

百代「うわっ!？」

蓮夜「ハアアアアアッ!!」

シュウウウウ!!

パン、パン、パン!!

鉄心「川神大戦終了」

バシッ

蓮夜「!!」

百代「・・・？」

翔「討ち取ったぜえー!!」

「「「イエエエエエエ!!」」」

おっ、キャップ達が勝ったか

蓮夜「終わったみたいだな」

百代「負けたのか？」

揚羽「百代」

燕「百代ちゃんの力は強いんだけど脆いんだよね」

百代「……脆い……」

しばらくして

大和「う…うん…」

岳人「やつとおめざめか特攻軍師？」

京「大丈夫、大和？」

大和「大戦は？」

一子「キャップがちゃんと決めてくれたわ。それに蓮夜がお姉さまを止めてくれてたし」

クリス「うむ、あと一步でモモ先輩は負けてたな」

由紀江「凄かったですね」

翔一「そんな事より勝鬨を上げようぜ！」

大和「分かった。…みんな！権利の権化であるS組は倒した！俺達の勝利だ！！えい、えい、おー！！」

「えい、えい、おー！！！！」

二話

蓮夜「何時までついて来るんだ、百代先輩？」

朝会ってからずっとついて来るし

百代「いいじゃんか別に」

蓮夜「俺、これからゲーセンに行くんだけど」

と百代先輩に何回目か言ったら

「兄ちゃん可愛い彼女を連れてるじゃねえか」

「女を置いてさっさとどこかに行きな!!」

「そうだぜ。その姉ちゃんには俺達二十人とやって貰うんだからな」

ザコ臭のする奴が現れた。しかも最後の奴キモっ

蓮夜「一応聞くけど百代先輩の知り合い？」

百代「そんな訳ないだろ」

なら

蓮夜「ぶっ飛ばすか」

「野郎！女の前だからって調子に乗りやがって、やれ!!」

「うおおおおお！！！！」

いつせいに掛かって来たが、動きが素人過ぎる

蓮夜「遅すぎる。織田流・獅琉翔雷！」

蓮夜は百代先輩を抱えて飛び、片手に気をためて雷が落ちる様に気を放った

ズドーーーーン！！

「……チーン」

全員に命中して二十人は気絶した

蓮夜「ザケ」

百代「れ、蓮夜？さすがにいきなりは困るのだが／＼／＼／＼」

現在はお姫様抱っこ中

蓮夜「ワリイ、ワリイ……？」

百代「どうし……た……？」

蓮夜と百代の前には大和と風間ファミリーの（百代を抜いた）女子が変な犬を追いかけていて、こっちに向かって走って来てた。

蓮夜「とりあえずあの犬を捕まえてくる」

百代「分かった」

大和達サイド

大和「兄さんと姉さんだ！兄さんー！その犬捕まえてー！」

蓮夜「オーライ、行くぞ犬！鱗殺しー！」

シュシュシュシュシュ！！

大和「殺してじゃないー！」

「ワオオオオオン！」

スカッスカッスカッスカッ！！

蓮夜「避けた！？ならば死点！」

ガスッ

「キュウウー！」

ドスッ

大和「死んでないよね？」

蓮夜「安心しろ死点に気を流し気絶させたただけだ」

百代「蓮夜。あとで私と戦って貰うぞ」

一子「どうすればそこまで強くなるの？」

由紀江「一手ご指南して欲しいです」

蓮夜「ただ道場を潰して日本を回っていただけだ」

クリス「それは悪ではないか!？」

蓮夜「安心しろ。授業料をばったくる所を潰すだけだ」

京「そういえばモモ先輩と蓮夜は何で二人で居るの？」

大和達サイドOut

京「そういえばモモ先輩と蓮夜は何で二人で居るの？」

京にそう聞かれたから普通に

蓮夜「しら「デートだ」ん…？」

「「え、ええええええええええ!？」」「」

蓮夜「違うからな。」

百代「チツ…連れないな蓮夜」

蓮夜「あらかた、鉄心さんにもっと女らしくしろってんで龍封穴を喰らったんだろ」

百代「そつだぞ。それでどんな奴が来ても守ってくれるのが蓮夜しか居ないからな」

大和「なるほどね。まあ、俺達は依頼も終わったし帰るね」

と言つて、大和達は歸つて行つた。

蓮夜「俺達も行くつか」

百代「ああ」

番外編

川神大戦から一週間がたった日、鉄心さんに呼ばれて川神院に行つて蔵の掃除を頼まれたのだが・・・

連夜「ガラクタや埃だらけだな」

掃除を頼まれたが埃だらけなので飽きたから面白そうな物を探しているが見つからん。

連夜「・・・おつ。それらしいのがあるじゃん！」

いかにも面白そうな箱があつたから開けてみるか

連夜「なんだ・・・秘伝書？・・・字は読めないが試してみるか」

百代サイド

買い物が終わって帰ってきた方がいいが・・・

百代「騒がしいが何だ？」

挑戦者かと思ひ向かおうかと思つたやさきに遠くから人が飛んで来て壁にぶつかった

百代「どうしたんだ？」

「く・・・むむ。ん？百代殿お帰りなさいませ。じつは、連夜殿が急

に暴れ出して」

百代「連夜が・・・？」

私は急いで連夜の所に向かったのだが

「連夜殿！落ち着いて——あべしっ！」

「いつせいかかって取り押さえ——うわらばっ！」

よく分からないが、リー師範代がギリギリ押さえている感じだった

百代「連夜！」

とりあえず呼んでみたら連夜は動きを止め、私だとわかった瞬間——
足飛びに飛びかかってきた。

ドシンッ

百代「いつつ・・・連夜？」

あまりの速度に避ける事ができなかったが痛みを我慢して連夜の名
前を呼んだら

連夜「にゃあ」

と鳴いたのだった。

しばらくして

ルー「連夜はおとなしくしている力」

連夜「フーッ！」

連夜が威嚇をしたのでルーさんはそれ以上は近づくのをやめた。

百代「どうでした？」

ルー「原因がわかったヨ。保管してあったいわくつきの秘伝書ネ」

百代「大丈夫なんですか？」

心配なのでルーさんに聞いてみたら

ルー「命に関係はないネ。象形拳と言うのを使って自己暗示で動物そのものになってしまう技だネ」

百代「動物そのものに。ならまた暴れ出さない様にみんなの所に連れて行くか」

ルー「よろしく頼むネ」

その後川神院を離れ秘密基地に向かった

しばらくして

百代「みんな居たのか」

大和「暇だったからね。ところで兄さんは何をしてるの？」

と大和が聞いてきたのでありのまま話た。

大和「じゃあ兄さんは・・・」

百代「ああ、今は猫だ」

一子「連夜に触っても怒らないお姉様？」

百代「秘密基地に連れて来てからは暴れてないから大丈夫だろ」

私がそう答えたらワン子が警戒しながら連夜の頭に触れた

連夜「ふにゃん？」

連夜は視線を上げワン子を見たら嫌がる素振りは見せず、気持ちよさそうに目を細めた

ワン子「可愛いわ」

連夜の頭を撫でてワン子は満足したようだ。その後も京やまゆっち、クリス、モロ、大和、キャップまでは撫でれたが

岳人「俺様も触るぜ！」

岳人が触ろうとしたときに連夜が動いた

連夜「ふしゃー！」

勢いよく連夜が岳人に猫パンチを岳人に食らわせた

岳人「ぐはあああ！」

百代「今は猫だから怒らせるなよ」

翔一「怒らせると岳人みたいになるな」

岳人「別に怒らせる気はなかったんだが」

由紀江「今は意識が猫なんですから手加減がきかないってますから」

岳人「怒らせる気はなかったんだがな」

卓也「猫だから警戒心が強くなってるんだね」

モロが冷静に分析した

クリス「岳人が悪いな」

京「そうだね」

クリと京に言われて岳人は落ち込んだ

百代「まあ、こんな感じで連夜は今はとっても不安定だから、みんなにもしばらく協力を頼みたい」

翔一「任せとけ！」

そうキャップが胸を叩いて請け合い、ほかのみんなも同調してくれた。

戦国BASARAにトリップ（前書き）

とりあえずBASARAにトリップします

戦国BASARAにトリップ

連夜「家の中から戦国時代の真田の旗や六文銭が出てくるとは。祖先が真田関係か？」

ある日、連夜は家の倉庫に面白そうなものが無いか見ていたら戦国時代の真田の旗と六文銭を見つけた

連夜「ん〜。ん？」

しばらく観察していたら、いきなり真田の旗と六文銭が輝き始めた。

連夜「・・・なんかヤバげだな」

そう思った矢先により一層激しく輝きだした

連夜「うわああああああ！！？」

百代サイド

百代「連夜」

私は連夜の家に行った時に倉庫が輝やいていた。その時・

連夜「うわああああああ！！？」

百代「連夜————！！！」

輝きが収まった時に倉庫に行った時に連夜の姿は無かった。

百代サイドアウト

連夜「う．．うん．．どこだここ？」

確か旗が輝いて気を失ったから普通に倒れているはずなんだが．．

連夜「何で布団で寝ているんだ？」

そう思っていたときに人が来た

？「目が覚めたで御座るか？」

連夜「ああ。ところで俺は何で此处にいるんだ？それとあなたの名は？」

幸村「失礼いたしました。拙者は真田幸村で御座る。此处は武田荘でお主が倒れていたのを姉上が見つけ連れて来たで御座る」

そうなのか。だとすると．．．

連夜「真田殿の姉上は俺の命の恩人って訳か。」

そっいえば名乗って無かったな．．．

連夜「まだ名前を言って無かったが俺は織田連夜だ」

幸村「なんとっ！？まさか信長の仲間か！？」

真田がそういつた時に周りに居た忍者の殺気だっている

連夜「まてまて！説明するから忍者達の殺気を静めてくれ！！」

？「へえ、アンタ俺様達の殺気に気づいたのか？」

幸村「佐助、この者をどうすればいいので御座るか？」

佐助「俺様ならすぐさま殺すが、姉さんや親方様が怒りそうなんだよな。・・とりあえず説明してくんない？」

俺は家に真田の旗や六文銭があつて、真田の旗が輝いて気を失った事を話した。

佐助「それで気づいた此処にいたって訳？」

連夜「そうだ。訳わかないだろ？」

幸村「ならばしばらく此処に居るで御座る」

「「えっ！？信じちゃうの！？」」

幸村「？？？何でで御座るか？」

連夜「ちよつといい忍者さん？」

佐助「なんだ？あと俺様は猿飛佐助だ。佐助でいい」

連夜「じゃあ俺も連夜でいい。・・・佐助、真田殿は天然なのか？バカなのか？（コソツ）」

佐助「残念な事に両方だ」

連夜「・・・面白いな」

佐助「そいつはどうも」

佐助と話していた時に人が来た。

？「あら、目が覚めたのね？」

幸村「あ、姉上！？」

姉上「て事は真田の姉か」

連夜「はい。助けてもらいありがとうございます」

雪「まだ名前を言つて無かったわね。私は真田雪よ。よろしくね」

連夜「俺は織田連夜です。」

雪「・・・まあ、いいわ。それよりアナタの服は初めてみるけど髪や目を見る限りでは異国の人？」

連夜「父親がこの時代なら異国の人で母親が日本の本の人間ですよ。」

幸村「つまり、どういふ事で御座るか？」

連夜「半分は日本の本の人間の血が流れていて、半分は異国の血が流れているという事です。」

タッタッタッ

「幸村様！上杉が川中島に来ています。急ぎ鎧をつけてください」

幸村「うむ、わかった」

連夜「俺もついて行こう」と

キングクリムゾン（合戦を飛ばします）

上杉軍に勝った後

謙信「流石は我が生涯の宿敵、完敗です甲斐の虎よ」

信玄「お主のお蔭で張りのある半生であった。心より礼を言っぞ謙信よ」

謙信「越後の明日は甲斐の虎に託します。この御方を信じ、皆で力を尽くすのです、よいですね」

信玄「任せておけ謙信。」

謙信「最後に銀色の髪をしたアナタに名前を聞きたい」

連夜「俺の名は織田連夜だったが今は真田連夜と言う名だ。」

謙信「よい名ですね。信玄よ早くやりなさい」

信玄「うむ」

幸村「親方様！」

信玄が謙信を介錯しようとした時に幸村が信玄様の名を呼んだ

信玄「幸村よ、よう見ておくのじゃ。お前にもいつか斯様なときが訪れよう。」

幸村「う・・・はっ！」

謙信「お別れです。私の美しき剣。」

信玄「さらばじゃ、謙信」

謙信「・・・」

信玄「てやあああああああ！！！」

ビュウウウウウウ！！！！と信玄様の武器が謙信公の首を跳ねようとした時に

「信玄公ーーーーーう！！！！！」

と言う声が聞こえた。

バシーーーーン！！！！

幸村「ぬううう・・・なあ。」

連夜「ん？」

幸村「あれは徳川・家康殿」

連夜「あれが・」

家康「絆を断つてはいけない信玄公」

謙信「・東将殿」

信玄「竹千代か？」

家康「ご無沙汰しています」

信玄「おおきゅうなりおつたのう」

家康「あはは、そのつもりでしたが。それでもアナタは大きい。ますますのご壮健ぶりにより。元気そうだな真田幸村」

幸村「お久しゅう家康殿」

その後、家康が色々喋り、信玄様がそれを成してみろといい、川中島の合戦は終わった

戦国BASARAにトリップ（後書き）

トリップしたあとは真田を名乗っています。武器は相変わらず拳一つ

幸村の虎の魂を継ぐ

川中島の戦いから数日後、幸村は家康の言葉で迷っていた。

今日も悩みを言ってきたから

連夜「信玄様に聞いてみたらどうだ？幸村」

幸村「その手があったで御座るかっ！！」

と言って幸村は走って行った。心配だから幸村の後を雪様と一緒につけて行ったが

幸村サイド

拙者は連夜に相談して、親方様に相談してみればと言われ、親方様に相談する事にした。

幸村「親方様ー！ッ！」

信玄「何用じゃ幸村。武田寮が広がり、これより忙しゅうとなる時に」

幸村「親方様にお伝えしたき義が御座います」

信玄「申してみよ」

親方様に話せと言われたので拙者は話した

幸村「はっ。拙者かつての薩摩への旅、そして毛利との戦より戻りのちより、この胸にくすぶる物が御座いました。ただそれは、掴みどころ無きばくたる心持ちでしかなく、如何様に言葉にしようかとそれを家康殿が身を持って示してくれたので御座います。」

全てを言つた時に親方様からはこう返された

信玄「甘いのか幸村よ」

幸村「申し訳御座いませぬ。されどこの戦の世にあつて、誰もが元より諦め、いや心いつさせぬ事を、拳一つで成さんと言う家康殿のふるいなき決意に拙者の胸はどうしようもなくたぎるので御座います」

信玄「今日かぎりには明日の為、鍛え上げ磨き続けたその槍を振るわぬ覚悟いたすともうすか」

幸村「はっ」

信玄「ぬううう・・・幸村よ」

幸村「はっ!!」

信玄「貴様ー!それでいい。それで良いのじゃ幸村ーッ!!」

幸村「えーっ!!」

幸村サイドアウト

連夜「いやいや、何故殴る信玄様?」

雪「何時もの事だから大丈夫よ。」

あ、壁が壊れた誰が治すんだよ。しかもずっと殴り合いしてるし・

連夜「ちよつと待った。武器はやばいだろ」

雪「ええ。今までは武器を使って無かったわよ」

佐助も出てきちゃったし

ウオオオオオオオッ！！

ヤバッ！急いで衝撃波が雪様に当たらぬようにした

ドゴオオオオオオッ！！！！

バキッドゴオオオオオオッ！！！！

連夜「ツツ」。雪様、大丈夫ですか？」

武田寮がぶつ飛んだが

雪「ええ。連夜が守ってくれたおかげで無事よ」

ズドーンと言う音の方を見たら信玄様が倒れていた

幸村「親方様。親方様――！！」

信玄「ううう・・・幸村よ。この武田信玄、伝えるべき事は全てお前に伝えたぞ」

幸村「うう・・・」

信玄「貴様は軍神を下しし儼を越えたのじゃ。虎の魂、確かに託したぞ・・・幸村」

幸村にそう伝えて信玄様は気絶？した

幸村「親方様？親方様――！！ウオオオオオオッ親方様――！！」

佐助「普通に隠居すれば済む事だと思っただけだなあ」

連夜「確かにな」

幸村「佐助、連夜」

佐助「各地で不穏な動きがある。報告はアンタにすれば良いんだな大将」

幸村の虎の魂を継ぐ（後書き）

オリキャラを簡単に説明します

『名前』

・真田雪

真田家の長女で連夜の恩人でもある。茶髪で腰までありかなりの美人。連夜を好いている。

関ヶ原へ

幸村が大将になって数日、佐助の情報で石田軍に続き、徳川までが各地で暴れているらしい事を知った。

連夜「しかしこの文、何回みても徳川が書いた物に見えないんだが。」

徳川からの文の内容は、絆を信じる者は今日の日本には居らず、賛同してくれる者も居ない。それなら石田軍とともに日本を滅ぼすと言っ内容だった

幸村「拙者もそう思うで御座る。」

佐助「天下を和睦させる為、諸国を巡ったものの相手にされず、結局力技に出たんじゃないかってのがもつぱらの噂だ。まあ、普通は胡散臭いと思うよね。この御時世、いきなり絆とか言われも」

幸村「そんな事は無い。いや、いかながらその様な動きが多いであろつ事は察せられる。しかし、だからと言って家康殿がこの様な」

佐助「この手紙、なんか匂うんだよね」

幸村「確かに怪しい」

佐助「いや、美味そうな匂いって言うか鍋臭いって言うか」

幸村「鍋？」

連夜「とりあえず、関ヶ原に向かえばわかるだろ」

一刻後関ヶ原に向かって出発した

佐助の話

気になるのは各地に差し向けた忍び隊の目に全く止まらずに奇襲が繰り返されている事だ。それらしい軍勢を誰も見て居ない。どこから攻められ落とされている。

幸村「（みぞうの兵器でも用いているのか？いずれにしても家康殿がする事とは思えぬ）」

関ヶ原に向かう途中、奥州の伊達軍と遭遇した。

政宗「血相かえてどこに行きやがる真田幸村？」

幸村「お久しゅう御座る。拙者今より徳川家康の元に参るところ」

政宗「義憤に駆られるなんてアンタらしいな。相手ごわくなっているって噂だ。せいぜい気をつけろよ」

幸村「いや、そうでは無く」

政宗「俺はこれから石田三成の所を蹴散らしに行く。とって返すつもりだったがそういう事なら家康はアンタに任せるぜ」

幸村「政宗殿」

政宗「アンタ、虎のおっさんの後を継いだんだったな」

幸村「いかにも」

政宗「上出来だった。お互い用事が済んだら祝がてら決着の party と行こうぜ」

幸村「貴殿との決着は望むところ。なれどこたび拙者は家康殿を討ちに行くのでは御座らん。確かめに参るので御座る。石田軍を無法するかのごとく他国を蹂躪し武將達を半ば脅して関ヶ原の地へ集わせ用としているのが家康殿では無いことを」

政宗「関ヶ原だと？・・俺も石田と会って確かめたい事がある。どっちにしろ殺し合う事に変わりは無いがな」

幸村と伊達の大將が話終えたあとどちらともなく軍を進めた。

政宗「また会おうぜ真田幸村」

軍がすれ違った後、伊達の大將が幸村に話かけてきた

政宗「そういえば、此処はアンタと初めて殺し合った場所だよな」

幸村「・・・そうで御座るな」

政宗「どうだい？今、決着を着けるってのは？」

幸村「何を申される」

伊達の大將がこちらに向かって馬を走らせて来た

政宗「アイツとの勝負はcoolもHotもねえ。どちらかが勝ち
どちらかが死ぬ、憎悪にまみれたdeathの地だ。heaven
Noah choiceだから今、アンタと殺し合っておきて
えんだ、真田幸村ー！！！」

幸村「ぬぐううう・・政宗殿」

ヒイインっていい幸村は政宗に向き直った

佐助「大将ッ！」

連夜「幸村！！！」

そして幸村の名前を言った。

幸村「受けざるは障害の悔いとあいならぬ。さような気合い断つ」

そして伊達の大將の所に行った

政宗「ハアアアアアアッ！！！」

幸村「ヤアアアアアアッ！！！」

キーーーーンッゴオオオオオオン！！！！

連夜「くううう。激しいねー！！！」

佐助「ああ」

佐助と話している時に敵の女の武將がこっちに突っ込んできた

連夜「佐助、後は頼むよ」

佐助「は？」

ハアアアアアアッ

ドゴオオオオオオンッ

連夜「アンタ強いな」

？「アナタこそね！」

キンキンキンキンッ

連夜「ハアアアアアアッ」

？「ヤアアアアアアッ」

ドゴオオオオオオン！！！！

佐助「終わりだ連夜」

？2「アナタもです。美月様」

連夜「邪魔をするな佐助！」

美月「アナタもよ小十郎！！」

佐助「アンタも何とか言ったくれ風来坊！！」

？「仕方ないね。アンタ達も天下のモヤモヤが消えるまで勝負を俺に預けてくれないかい？」

美月「邪魔をしないで！！」

ガキーン

？「うおつと！」

連夜「烈火ッ！！」

ガキーン

？「おわっ！？」

ガンガン・ガンガンガン・ガンガンガンガン・ガン

？「あらよつとー！！」

ガンッ！

ドゴオオオオオオンッ！！！！

連夜「！？ふん。此处はアンタの言うとおりにしてやる」

美月「私もよ」

慶次「ありがとよ。俺は加賀の前田慶次。「キキッ」「コイツは夢吉」

連夜「俺は真田連夜だ。」

美月「私は政宗の妹の伊達美月よ」

慶次の顔を保たせる為に今回は譲った。

関ヶ原へ（後書き）

オリキャラを簡単に説明します

『名前』

・伊達美月

政宗の妹だが南蛮語は話さない。双剣の使い手で小十郎と政宗と同じくらいの強さ。髪は腰まである

乱戦（前書き）

BASARAは終わりにして新たな世界へトリップさせます

乱戦

関ヶ原についた時に家康が泰平の世を語ろうと話していた。

慶次「家康、そうか。」

家康「一力を示した者だけがのし上がり、生き残る。それが戦国だ。だがそれでは、いつになっても争いが終わらない。力のみに頼る者の滅びを我々は二度もみてきた。滅びを望んで力を振るう者など此処には居ないはずだ。」

慶次「俺は加賀の前田慶次。兄さん方の腕っ節、何でそんなに強い知っているかい？・・好い人を守る為だ。生まれ育った故郷、かけがえのない大事な物を奪われちまう。そんなのはもう止めにしないか？」

幸村「拙者は甲斐武田、真田源次郎幸村。これまで、幾多の戦場に数多の強者達と熱き刃を交えて参りもつした。群雄達が武勇を振るいし果て、天下を掴みし後目指す物は等しく平和で御座る。己の欲を野心を廃した誠の武士の心を持って家康殿、前田殿とともに今こそ明日を語り会いましょうぞ！！」

家康「・・真田、今ある絆を守り、見知らぬ者と昨日まで敵と新たな絆を結び広げて行こう。さあ、皆で金吾の鍋をつつきながら泰平の世の話をしよう。」

全員が家康達の話聞いて鍋に向かう途中で待ったがかかった。

政宗「weight・ちよいと待ちな。その前にあっちこっちを襲

つてたのが誰なのかはつきりさせようじゃねえか。」

美月「兄さんの言うとおりね」

そう言つて全員が向こう側を見ると石田三成がいた。

家康「三成、待つて居たぞ。こっちに来てお前もみんなに話してくれ」

三成「好きにやっている。私を巻き込むな。真の絆とは奇跡だ、その歡喜を奪われた悲憤と憎悪は貴様の吐くような綺麗事ではけして消えない！」

三成が喋り終えたあと、凶王軍が大軍を持つて攻めてきた。

うおおおおおっ！！と来た時には全軍が疑心暗鬼に駆られた。

家康「・・・三成」

「やはり結託しておつたのか！！」

「徳川と石田に図られたぞ！！」

「己、騙される所だつたわ！！」

最後の奴が言うと同時に全軍が抜刀した。

慶次「待つてくれ！！そうじゃない！！」

慶次が言つても石田軍は攻めて来ているので話を聞いていなかった。

連夜「！！武田の殿と伊達の殿はどけ！！覇の風烈ッ！！」

ヒューーーーーウ！！

伊達と武田の殿に飛んできた弓を拳に気を溜めてはね返す。周りの軍は奇襲によりダメージを受けていた。

元就「愚かな絆など。見えない糸に過ぎん。人は争える物そのことわりに抗うとは愚者の所業。関ヶ原に集いし全ての駒共よ、見知らぬ顔あらば残らず斬らんといたすがよい。旗がたがわば全て敵ぞ。生き残った者が天下人。これぞ天下分け目の戦場なり！！」

幸村「あれは毛利元就」

元就「捨て駒如きに葬られる我では無い。」

毛利の言葉で更に戦場が荒れた。

「生き残れば」

「俺が天下人だ！！」

「俺が・・・！」

更に殺し合いが激しくなり誰も家康達の言葉を聞かなくなった。

「いやああああッ！！」

ギリギリッ

連夜「幸村！防戦も限界だ！！」

佐助「そうだぜ大将！！」

小十郎「真田幸村！一代決心で望んだ場のようだが腹の括り時だぜ！！一軍の将としてお前はどつする？」

ザシユツ

連夜「ぐううッ」

慶次「クッ」

家康「くううッ」

幸村「この関ヶ原にて全ての過去を絶たんが為に・・・武田軍総員に告ぐ、応戦致せー！！」

「「「うおおおおおっ！！！！」」」

佐助「心得た！！」

連夜「了解っ！！ハアアッ！！」

「グフツ」

連夜「陽岩割りッ！！」

ドゴオオオオオオンッ！！！！！！

「くぐああああああっ！！！！」

視界はバツチリだな・・・手が透けてやがる

連夜「時間は無いって事か・・・」

その後、信長が現れた時には幸村とははぐれてたのでそのまま消えた。

なお、この戦は石田三成が信長の首に傷をつけてお市が来て信長と共に消えた。

その頃連夜は・・・

連夜「どこだここ？」

新たな世界にトリップしていた

真・恋姫無双にトリップー！（前書き）

真・恋姫無双にトリップします

真・恋姫無双にトリップ!!

関ヶ原の最中に体が消え、新たな世界に来たが・・・

「そこをどけ!!小僧!!」

知らないおっさんに剣をむけられていた。しかも後ろには

「退き・・・な・さい。貴方ま・・・で死ぬ・・・わよ・・・」

死にかけの美人さん・・・とりあえず、美人さんを助けるか。

連夜「安心しろ、アンタが息絶えるまでは守ってやるから」

美人さん「無理・・・よ!・無手の・貴方が・・・黄祖に勝てる訳が・・・!!」

美人さんがそう言った後、直ぐに剣が俺に襲いかかってきたので

パキンッ

とりあえず折ってやった

黄祖「・・・(ポカーン)」

美人さん「・・・(ポカーン)」

黄祖って言うおっさんと美人さんは固まってしまったが・・・

黄祖「・・・ハッ、ハッハッハッ。小僧に免じて孫堅、首を斬るのは勘弁してやる。貴様はもう戦場に立てないだろうしな」

そう言つて黄祖の軍は撤退した

孫堅「あり・・・がと・・・う・・・。」

連夜「いえいえ、とりあえず回復させますね？ハアアッ」

孫堅さんに氣を流し、出血をとめた。

連夜「とりあえず、死ぬ事はありません孫堅さん。でもしばらくは生活に苦労しますが」

孫堅「ありがとう。貴方は命の恩人だから真名を預けるわ」

氣を流したから喋るのや痛みはなくなったようだ・・・真名？

連夜「真名とは？」

孫堅「真名を知らないの？真名とは命よりも大切な物でその人の生き方その物を表しているの。本人の許可なく真名を呼べば殺されても仕方ないのよ。」

連夜「危ないですね。間違えて呼べば殺されても仕方ないか」

水連「私の真名是水連、よろしくね。え〜と・・・。」

連夜「俺は連夜です」

水連「連夜」

連夜「はい、水連さん」

しばらく水連さんと話して、とりあえずは水連さんの国に行く事になった。

連夜「水連さん、背負って行くので乗って下さい」

水連「悪いわね」

水連さんを背負ったはいいが、軽いは胸が当たるは大変だった。

連夜「水連さんむ、胸が・・・／／／／／」

水連「当ててるのよ」

・・・本当に建業まで行くの大変そう・・はあゝ

真・恋姫無双にトリップ!!（後書き）

孫堅は死にません。

オリキャラを簡単に説明します

『名前』

・孫堅そんけんぶんだい文台

真名は水連。

容姿は孫策に近くてかなり三児の母と思え無いくらい若く美人。胸はFくらいで年齢は25歳。江東の虎と呼ばれている。

建業に到着！！（前書き）

初めてですがエロをいれました

建業に到着！！

無事に建業に着く事ができた。途中、背負って運んだは良いが、水連が胸は当てるし耳は甘噛みするで大変だったし

水連「この町に私の城があるわ」

連夜「はいはい、わかったよ」

地で話さなきゃ性的いたずらを図ってくるし

水連「着いたら良いことしましょうね。」

・・・マジ勘弁。水連は綺麗で美人だから「あらやだゝ美人だなんで」平然と心読むの止めてください。

しばらく歩いて門番に呼び止められた

「そ、孫堅様・・・ですか？」

水連「そうよ。帰って来るのが遅くなってご免なさい」

水連がそう言った時に門番は城下に走って行った。仕事はいいのか？

??? サイド

劉表との戦いの時に母様を失い、大勢の仲間がこの世から去って逝った。

祭「・・・策殿」

冥琳「・・・雪連」

私「わかっているわよ祭、冥琳」

早く立ち直らなきゃいけない事くらい

私「少しでいいから時間をくれないかしら」

祭「わかりました」

タダダダダダッ

そう言った時に吉報が飛び込んできた

バンッ！！

「も、申し上げます！！はあ、はあ、そ、孫堅様が、孫堅様がお帰りになさいました！！」

えっ？何て言った？母様が帰って来た？

祭「策殿！！」

私「ええ！！行きましょう！！」

兵に場所を聞き、母様が居るって場所に走って行った

孫策サイドアウト

連夜「凄い人気だな水連」

水連「あはは、みんな死んだと思ってたからよ」

まあ、死んだと聞いた人間が生きて帰ってきたら誰でもそうなるな

「母様――!!」

と言つて水連を小さくした子が水連に飛びついた

水連「っ……雪連ただいま」

水連は痛そうな顔をしながら子供の名前を呼んだ。

連夜「水連、大丈夫か？」

雪連「貴様!!何故母様の真名を!？」

連夜「水連に言いつて言われたからだけど」

雪連「本当ですか母様!？」

水連「ええ、本当よ。あとで説明するから」

しばらくして玉座の間に着いた。

水連「じゃあ説明するわね」

水連は崖から落ちた後、黄祖が崖の下で待ち受けていて死んだと思

った。だけど、俺が来て黄祖と水連の間に入って黄祖の武器を折って退散させた後に、氣を使って回復させてくれた事とその後我真名を許した事を説明した。

雪連「そうなの。なら、私も真名を渡すわ私の真名は雪連よ。よろしくね連夜」

冥琳「私も孫堅様を救っていただいたので真名を許します。真名は冥琳です。」

祭「儂もじゃ。真名は祭じゃよろしく頼むぞ連夜」

その後、思春や連華や穩にも真名を渡された。

水連「言い忘れたけど連夜には雪連達の父親になって貰うわよ」

と水連が爆弾を投下した

「「「ええええええええええっ!?!?!」」」

連夜「初耳だぞ水連!?!」

雪連「本気なの母様!?!」

連華「私は別に……」

否定しろよ連華

思春「連華様がよければ」

祭「連夜、お主何歳じゃ？」

連夜「17歳だけど」

祭「なら大丈夫じゃろ」

否定してくれる人が居ない

雪連「私より強ければいいわよ？」

否定してくれてるのか？

水連「安心しろ。雪連じゃ勝てない。黄祖と対峙している時に一瞬だけ殺気を放ってたけど私でも勝てないわ」

雪連「なら、勝負したい」

祭「儂も婿殿の強さをしりたいのう。」

水連「わかったわ。訓練所に行きましょう」

連夜「婿の件は無しにでき」「ない!!」「」ですよね・・・はあ」

結局、誰一人として否定派が居なかった

連夜「本気は出さなくていい？」

雪連「本気でお願い」

と現在は訓練所に居るんだけど、本気はまだ無理があるな

冥琳「これより、孫白付対連夜の試合を行います。どちらかが気絶、降参、武器を落とさせた方が勝ちです。・・・始めっ!!」

冥琳の合図と共に雪連の懐に入る

雪連「チッ・・・!!」

ヒュウウウツ

ガキーン!!

連夜「よく初撃を弾いたな。ならこれはどうだ?」

ビュッビュッビュッ

ガッガッガッキーンツ!!

冥琳「ここまで!!」

雪連の武器が飛んで勝負が決まった。

雪連達の親になったその日の夜、水連の部屋に呼ばれた。

連夜「何のようだ?」

水連「夫婦が夜中にやることなんて一つよ」

そう言っつて水連に接吻された

クチュ、ピチュ、クチュ

連夜「…ん…んう…」

水連「ん……んう…」

連夜「…本当にやっていいんだな？」

水連「ええ」

水連から了解をえたのでベットに押し倒した。

‘クチュ’

水連「あんっ！」

連夜「水連のココ、もうこんなに濡れてる」

そう言つて水連の蜜を見せる

水連「見せないでもう・・・／／／／／」

連夜「いれるよ」

にゅぷんっ

水連「あああああん／／／／／」

連夜「くっ…締まる」

かなり締めつけられる

連夜「動くぞ」

水連「はああああん・・もつとゆつくああああん／／／／／
／」

グチュグチュ

水連の中に出たり入ったりを繰り返す

水連「れ、はああああん／／／／れんやゝああああん／／／
／／いつちやうよゝ！！」

水連のあそこが凄い締め付けてきた

連夜「くっ……出るっ！！」

ドビュドビュッ

水連「イクウウウウ！！ああああああん！！／／／／・・
・」

水連はいった後に気絶したらしい。

連夜「お休み水連・・チュッ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9854y/>

大和の義兄は最強の武士！！

2011年12月24日00時48分発行